

于母の例外的字音

太田 斎

0. 前言

平山久雄 1962 は云母字の「為」を「重紐三等の字である」と述べ、これに続く注で、「為」の如きいわゆる「于母」の字は、常に三等であつて、重紐を含む諸韻にあつても、それと對立する四等の字をもたないが、やはり重紐三等の系列に並ぶと認められる」(p.181) と指摘、また「于母は多く合口の韻母と結合し。開口の韻母と結合してあらわれることは少ない。于母を示す反切上字の殆んどが合口であるのは(例えば李榮「切韻音系」§33, 34 の表を参照—原文注) この事實の反映である。」(p.185) とも述べている。既にここに于母の特徴が示されているのであるが、主たる論点ではないため詳しい検証はなされていない。

ここで述べられている特徴をより具体的に言うならば、開合の対立の無い韻(-u 尾、-m/-p 韻など)を除けば、于母が開口で現れるのは以下に示す2例しかなく、他は全て合口である。そして于母の重紐帰類については以前、太田斎 2012 で分析を試み、上掲の平山久雄 1962 の指摘を検証して全てが B ということを確認した。下記の例外2例のうち、重紐に関わるのは1例で、それもまた B と判定される。つまり切韻から帰納される中古音の体系においては、開合を問わず A の例外は存在せず、合口 B ばかりの中に1例のみ開口 B が存在するということである。本稿では、重紐に関わらないもう一つの例と合わせ、この二つの例外の成立要因について検討を試みたい。まずは自己盗用のような様相を呈することになるが、先ず総て合口 B と判断する論拠の紹介から始めたい。

1. 検証方法

本節は太田斎 2012 で論じたことの繰り返しである。重紐の帰類を判断するには類相関のパターンを見ることになるが、この場合、類相関第一式¹⁾「C+于」のパターンで帰字が A、B のいずれになっているのかを調べることになる。A、B は平山久雄 1962 の言う「重紐四等」、「重紐三等」に同じ。帰字の帰類は『韻鏡』、『七音略』といった中古音を反映する韻図における配置状況、切韻系韻書に見える反切を直接の根拠とし、他書に見える反切を傍証として判断される。未知数 X である于母が上字だと当然、帰字も于母字で、X(于)+A→X(于)、X(于)+B→X(于)のパターンからでは、下字の使用が A、B のどちらかに大きく傾いていたとしても、類相関第二式として、前者については A+A→A と B+A→B、後者については A+B→A、B+B→B のいずれでもあり得る上、于母が重紐に関わらないものとして第一式 C(于)+A→A、C(于)+B→B 相当と解釈することもまた可能であり、重紐の帰類をこのパターンに基づき判断することはできない。

上田 1975 推定の原本『切韻』の該当反切は以下の通り。同書で増加小韻と認定されたものは省く。該当例の無い韻については韻目も省略する。

韻目	帰字	反切	類相関状況		
支	媯	居為	見合 B ←C+X	cf. 垂: 是為	常合三

	虧：去為	溪合 B ←C+X	贏：	
	危：魚為	疑合 B ←C+X	吹：昌為	昌合三
	麾：許為	曉合 B ←C+X	眭：息為	心合三
	透：於為	影合 B ←C+X	隨：旬為	邪合三
至	獠：許位	曉合 B ←C+X		
祭	劇：居衛	見合 B ←C+X	cf. 綴：陟衛	合三←知+X
軫	窘：渠殞	群合 B ←C+X		
仙	紉：居員	見合 B ←C+X	cf. 栓：山員	生合二 B←二+X
	眷：去員	溪合 B ←C+X		
	權：巨員	群合 B ←C+X		
庚	兵：甫榮	幫 B ←C+X		
	兄：許榮	曉合 B ←C+X		
梗	皿：武永	明 B ←C+X		
	憬：舉永	見合 B ←C+X		

今、B←C+X(于) から、X=B という結論を引き出すことができる。上掲例の全てが B 類反切である。つまり中古音では于母小韻には重紐の対立は無いのであるが、類相関の状況から見て、B 類しかなく、対立する A 類を欠いているというふうに解するべきである。(以上、太田斎 2012, pp.227-228 の紹介)

2. 例外について

冒頭で指摘した極僅かの例外とは『広韻』に見られる以下の二つの開口小韻である。一つは仙韻増加小韻開口 B “瀉：有乾切”、もう一つは開合の対立の無い止韻の“矣：于紀切”小韻である。具体的には該当小韻は以下の通り。割注は今ポイントを小さくして示すことにする：

仙韻	瀉	水名，出西河也。三。有乾切。	螞	螞蟻，蟲名	焉	語助也。又於乾切。
Cf.	員	《説文》作員，物數也。王權切。又云、運二音。四。	圜	天體。	圓	上同。
	援	潺援。				
止韻	矣	《説文》云，語已詞也。于紀切。二。	葵	蒿也。		

前者は他の切韻系韻書では切三、王一、王三には見えず、P2014-3 背に見えるのみ。上田正 1975 の判読によれば、“瀉：于乾”で、小韻所属字には他に“螞”が見える²⁾。云母小韻には上に参考として示すように他に“員：王權切”がある。こちらは切三、王一、王三、P2014-3 背(宣韻)にも見えるから、一先ず原本切韻に既に存在していたと見なして良からう。“瀉：有乾切”はこれと対立するのであるから、A : B でなければ、開合の対立である。A の孤例と見做すか、開口と見做すか、二様の解釈の余地があるが、もう一つの止韻の例と合わせ、開口と見做すのが穏当であろう。止韻の例は切三、王一、王二、王三で確認でき、反切用字の異同は無い。なお止韻にはこれ以外に于母小韻は存在しない。

2-1. 仙韻の場合

『広韻』では小韻所属字 3 字のうち、“瀉”は願韻“於建切”、“焉”は元韻“謁

言切”の又音があり、声母はどちらも影母である。“螞”には他音が見られないが、原本『玉篇』では、“馮：於乾”、“螞：猗然”、“焉：於連”といずれも影母で、于母の字音は収録されない。『集韻』では于母“馮：尤虔切”小韻は『広韻』同様、“馮”、“螞”、“焉”の3字から成り、所属字の増加は見られない。しかもこの3字全てが影母“焉：於虔切”小韻にも収録されている。『広韻』でも、“焉”声字の“焉”、“螞”、“鄢”は影母小韻“焉：於乾”に収録されている。恐らく“焉”は本来は影母字であつたろう。専ら語気助詞として用いられ、常に前に何らかの音節が存在し、かつ弱くぞんざいに発音されることにより、*ʔ->ɦ-の変化を生じ、それが代表的な読音となって韻書にも掲載されることになったものと考えられる。丁度、普通話で語気助詞の“啊”aが弱く発音され、直前の音節の韻尾の影響を受けて、ya(呀)、wa(哇)、na(呐)、nga(“啊”のまま。然るべき文字無し)と、様々なvariantが見られるのに似た、一種の弱化現象である。今、普通話の発音は拼音で示すが、このうちngaは実際には存在しない表記である。“馮”も“螞”も僻字であり、恐らくは“焉”への類推により“有乾切”の字音となったものと見られる。興味深いことに宋本『玉篇』を見ると、“馮：於虔”、“螞：猗然”、“焉：於連……又矣連”となっており、3字のうち“焉”のみに于母の読みが加えられており、この推測を支持する状況を呈している。

“有乾切”の小韻代表字が“焉”でないのは、この字が既に原本切韻から存在すると推定される影母小韻“焉：於乾”の代表字となっているからであろう。この小韻は切三、王一、王三で確認できるが、帛字、上下字に異同は無い。“有乾切”小韻所属字は他に“馮”、“螞”の2字のみ。ともに僻字で、代表字としてはいずれも十分な資格を有するとは言いが、相対的に川の名の“馮”の方が虫の名の“螞”より認知度が高いために代表字にされたということなのだろう。『広韻』では“馮”に又音があるのに対し、“螞”には又音が無いから、代表字としての相対的適性は“螞”の方にあるのではないかとの反論の余地もありそうだが、“馮”の影母の又音は仙韻ではなく、願韻所属である。そして“堰：於建切”小韻自体は『広韻』の他、王一、王二、王三、S5980にも見られるが、この小韻に“馮”の収録が確認されるのは『広韻』だけであるから、ここで代表字としての適性を議論する上で“馮”に又音があることは問題とするには及ばない。ただ何故この2字だけに類推が生じたのかは不明である。或いは本来は影母“焉：於乾”小韻の方に増加字として付け加えるべきものが、誤って于母“*焉：有乾”小韻に付け加えられ、所属字が“焉”の1字のみではなくなった。その際に代表字が取り替えられたということなのかも知れないが、そうであっても何故この2字だけが、という問題は残る。今は増加字の追加が段階的に行われるに当たり、この2字の追加と他の“焉”声字の“焉：於乾”小韻への追加が同時期に行われたものではなかったとして説明できるものと一先ず考えておく。

2-1. 止韻の場合

0. 前言で開合の対立の無い韻(-u尾、-m/-p韻など)には于母が現れると述べた。-u尾、-m/-p韻は韻尾に円唇化作用が認められることで、韻母全体が合口的音声特徴を帯びることになるのであろう。この他、韻図で確認すれば、第1転開の東韻に“雄”、第12転開合の虞韻に“于”、麌韻に“羽”、遇韻に“芋”が見られるが、通摂、遇摂諸韻にしても合口と解釈する余地がある。これらに対し、止摂之韻は同様に開合の対立が無いものの、合口的要素が皆無で、対立する合口韻類を欠いた、開口韻のみから成

る韻と見做されている。つまり之韻上声止韻に見られる于母小韻について、これのみを合口と見做す訳には行かない。

この止韻于母の例についても、前節の“焉”同様に解釈できる。つまり“矣”もまた本来は影母であったが、専ら語気助詞として用いられ、弱くぞんざいに発音されるのが常であったことにより、“焉”同様、*ʔ- > fi- の変化を生じ、それが代表的な読音となって韻書にも掲載されることになった。もう一つの所属字“葵”は声符を共有することから、類推により同じ読みになったということであろう。『広韻』では“矣”、“葵”はいずれも又音の収録が見られないが、原本『玉篇』では“矣”は影母“於紀反”で、于母の字音は収録されない。“焉”の状況と同様である。ただ僻字の“葵”の方は原本『玉篇』、宋本『玉篇』のいずれにも見えない。『集韻』では于母“羽己切”の他、旨韻邪母“序姊切”にも見える。“英葵”と併記されており、“葵”は“英”の異体字の扱いである。“英”ならば『広韻』旨韻邪母“徐姊切”小韻に見える。類推による変化が生じる以前の字音はこのようなものであったのかも知れない。

3. 結論そして今後の課題

これ以外だと真韻に匣母 A の“磳：下珍”がある（先韻“胡田切”の又音あり）。これは真韻に匣母の助紐字が必要であるところから、無理に捻り出した実在しない字音を表わすものであり、ここで検討するには及ばない。これについても太田斎 2012 で既に論じた。本稿で検討した例外は音変化現象により生じた特殊な字音が固定化されて、韻書に収録されるに至ったもので、類推或いは増補の際の杜撰により、小韻所属字が“焉”、“矣”の各 1 字に止まらなくなったと考えられる。

合口 A の有無に関わる事象として、邵榮芬 1995 は『經典釋文』における匣（于）母と羊母の混用を指摘していることは注目し値する。但し邵榮芬 1995 は、混用の具体例を挙げた上で、「顯然是以母變讀為匣母，而不是匣母變讀為以母」と述べ、かく結論付ける 4 つの理由を挙げている（p.117）。今、挙例、理由どちらも省略。『玉篇』に似て、『經典釋文』でも匣母と于母の混用が『広韻』より多く見られるので、匣母で于母をも代表させ、このような表現をしている。しかしながら挙げられている例を見ると、重紐 A 合口の例ばかりである。つまり重紐 A 合口の環境下でのみ于母と羊母の混用が見られる。この状況は、『經典釋文』のみならず、『玉篇』にも見られる。江南讀書音の特徴の反映かも知れないが、歴史的に見れば重紐合口 A はそれ以前には存在したが、『玉篇』等では羊母と合流してしまっており、中古音に至ってはその跡が全く見られなくなっている、と考える方が合理的であろう。なおこの合流現象については別稿で具体例を列挙して論じる予定である。

本稿で扱った例外を除けば、体系的に于母には開口が欠けていることになるが、本来は存在したと考えるのが自然である。先行研究ではこの問題について上古音との関連から論じられているが、筆者には今のところ定見は無い。これも今後の課題としておきたい。

注：

1. 平山久雄 1977 の用語。重紐韻の反切用字使用のパターンである類相関を以下のよう
に示す。反切上字が C のものを第一式、A もしくは B のものを第二式とする。

1) 第一式 C+A→A、C+B→B

- 2) 第二式 $A+A \rightarrow A$ 、 $A+B \rightarrow A$; $B+A \rightarrow B$ 、 $B+B \rightarrow B$
2. 該当箇所“馮：于乾”の部分は本稿筆者が確認できる限りで原本写真では欠落して
いて、辛うじて小韻代表字の積文部分と思われる“……陽河中又”とこれに続く小韻
所属字“𧈧、𧈧。音灣”の部分しか残っていない。何故にかく判読できるのか不明。
より鮮明な写真或いは原本では確認できるということか？

使用テキスト

玉篇

原本：《玉篇零卷》，大通書局，1972

宋本：《大廣益會玉篇》（張氏澤存堂本），中華書局，1987

篆隸萬象名義

高山寺古辭書資料第一（高山寺資料叢書第六冊），東京大學出版會，1977

廣韻

校正宋本廣韻（張氏澤存堂本），台灣藝文印書館，1967

参考文献

日本語

上田正 1975 『切韻反切総覧』（均社単刊第一），均社，222p.

太田斎 2012 于母重紐問題と助紐字を巡る臆説，『開篇』31，pp.226-250

平山久雄 1962 切韻系韻書の例外的反切の理解について—「為・遠支反」をめぐって—
一，『日本中国学会報』第14集，pp.180-196

平山久雄 1977 中古音重紐の音声的表現と声調との関係，『東洋文化研究所紀要』73，
pp.1-42

中国語

邵榮芬 『經典釋文音系』，學海出版社，1995，541p.